

美人詩抄

哲

所謂美人詩を

愛誦する所以

暗黒に對して光明を、不

完全に對して完全を、醜

對して美を悦び迎へるは

人間本來の要求である。

誰かは云つた、男性が自

身の肉体を醜劣なるものと

觀し自己の精神を利己的な

低劣なものと悟つた場合に

女性をその補足と考へ美し

い肉体と美しい精神とを求

めるであらう、これ女性の

理想化であり『女性崇拜』

精神的乃至肉体的の補足と

して崇はうとする傾向はダ

テに於てこれを見、ゲー

テに於て之を認め更に近代

に於てブゼンの諸作に於

て之を發見するのである。

當否は敢て與り知らない

只かの基督教がその宗教を

縱に一貫してゐる思想が

『愛と云ふ一言に代表され

てゐると云ふも過言でない

に拘らす極端な慾慾主義を嘲笑

し或は所謂『隣人愛』を奉す

るトルストイが男女關係によ

り生ずる罪惡多種多様で

而も人間一般に共通な罪惡

はない、と性慾を罪惡の根

元であるとした觀方が純理

論としての價値は知らず。

現今の所謂社會道德から

觀て以て果して大衆向と云

へるかどうか更にかの所謂斯く

がする事が旋て今日の如

る。

赤彦先生の話いづるときわが怠りの下に

にあがらし

中納言塚のほとりに君住めり中納言塚の鳥はもみ

ぢばれ寒く音して降れり窓下にあはれ夜もすがら

庭のゆく見ゆ

ちす

赤彦先生の話いづるときわが怠りの下に

にあがらし

馬に跨つて醉國に遊び心儀

にして渾身の陶酔を怠い

にひかれで、郷に入るの快

楽士塚おはき里の道したしまるおくられて来れば

其のゆく見ゆ

ちす

赤彦先生の話いづるときわが怠りの下に

にあがらし

馬に跨つて醉國に遊び心儀

をして渾身の陶酔を怠い

